

羽曳野市指定文化財

畑田家住宅活用保存会年報

No.18 / 2019



<畑田家住宅活用保存会 2019 年度行事予定>

初夏の一般公開と第 22 回畑田塾 2019 年 5 月 19 日(日)

「歴史ある畑田家住宅で聴く、歴史あるヴァイオリンとピアノの音色」

ヴァイオリン 木野雅之(日本フィル・ソロコンサートマスター)、ピアノ 吉山 輝

秋の一般公開と文学フォーラム 2019 年 10 月 13 日(日)

「正岡子規の生と死 31才の自覚」— 子規の短歌を読む

大手前大学前学長・客員教授、大阪大学名誉教授 柏木隆雄

春の一般公開と科学フォーラム 2020 年 3 月 15 日(日)

「ガラスの科学を考える」

大阪府立大学名誉教授 南 努

初夏の一般公開と生命機能フォーラム 2020 年 5 月 17 日(日)

「疾患と老化に対抗する細胞の働き・オートファジーの謎を解く」

～ノーベル賞の大隅先生と挑んだ 22 年～ 大阪大学生命機能研究科教授 吉森 保

ノーベル医学生理学賞発表に際して思ったこと

会長 畑田出穂

先日ノーベル医学生理学賞の発表があり、京都大学名誉教授の本庶佑氏が受賞されました。心からお祝いを申し上げます。受賞理由は、「免疫抑制作用の阻害による新しいがん治療法の発見」です。本庶先生は1992年に免疫T細胞の表面にあるPD-1たんぱく質を発見されました。当初、このたんぱく質はまったく別の働きをするものとして見つけられたものでした。しかし、その後の研究でPD-1が、がん細胞の表面にあるPD-L1というたんぱく質と結びつくことにより、免疫細胞の働きを抑える「ブレーキ」としての役割をしているという予想外の発見につながりました。さらに、この働きを抑制することでがんを治療できることを明らかにされました。この研究により開発されたのが「オプジーボ」という新しいがん免疫治療薬です。この薬が登場してから、治療の手立てがなかった進行がんの患者さんでも、がんが劇的に縮小した報告などが相次ぎ、効果の出る患者さんでは長期生存の期待が高まっています。

このような大きな発見や発明はなかなか狙って出てくるものではなく、地道な基礎研究の中での偶然の発見から出てくることが多いような気がします。昨今は、特定の目標を設定し達成するプロジェクト指向の研究が優先され国の大型予算が配分されていますが、このような研究ではなかなか今回のような成果は得られないかもしれません。またプロジェクト研究に国家予算が集中される背景には日本国の財政事情と「選択と集中」ということもあるかと思います。日本の基礎科学研究の予算は先進国、新興国を含めたなかで唯一、横ばいで止まっており、日本の基礎科学研究の将来が危ぶまれます。

日本人のノーベル賞受賞者は本庶氏で26人目となり日本の国際的地位は高いように思われます。しかしながら受賞理由の研究から受賞までは平均29年かかることが知られており、この点を鑑みると1989年ごろの成果が今評価されているということになります。すなわち現在の受賞ラッシュは日本がバブル全盛であったときのなごりをみているに過ぎません。

基礎科学も文化財も文化という意味では同じ範疇に入ります。こんな時代だからこそ地道な文化活動を続けていくことの重要性を私たちは再認識する必要があると思います。

平成30年度 事業報告

1. 初夏の一般公開とフォーラム 2018年5月20日
「木造住宅これまでとこれから」
建築家 石井智子
2. 秋の一般公開と科学フォーラム 2018年11月11日
「巨大分子の面白さープラスチックとゴム」
大阪大学名誉教授・畑田家当主 畑田耕一
3. 春の一般公開と古民家フォーラム 2019年3月10日
「古民家に学ぶ」
寺西興一、青山修司、吉村堯、細見克、地村邦夫
4. 出版
「宇宙で一番低い温度をつくる」
(出版シリーズ No.14) ISBN978-4-903247-13-7
元大阪市立大学学長 児玉隆夫
5. 畑田家当主 畑田耕一による教育奉仕活動等
4月23日 西宮市立西宮高等学校
2月14日 大阪府立桜塚高等学校
3月4日 豊中市立箕輪小学校

役員 (2019年度)

相談役 中村貞夫
会長 畑田出穂
副会長 畑田拓男、畑田達也
事務局長 北山辰樹
代表幹事 畑田耕一
幹事 石井智子、奥田 寛、笠井敏光、畑田直樹、澁谷 亘、畑田勇二、畑田弘美、矢野富美子
会計 畑田勇二、畑田庸雄
会計監査 澤田秀雄、宮田幹二
新正会員 西蔵仁司、西野幸治
新特別会員 寺西興一、青山修司、吉村堯、細見克、地村邦夫

会員数 264名

特別会員数 65名

羽曳野市指定文化財に指定される

畑田家住宅は、これまで国の登録有形文化財に登録されていましたが、史料調査等によって、主屋が明治十年に建築されたことが新たに判りました。また、長屋門や二階蔵等も建築当初の姿を良くとどめ、敷地に沿って並ぶ附属建物として豪壮な屋敷構えを構成し、屋敷地全体がよく整備、維持された上に、主要建物の建築・改修年代がほぼ明らかで、羽曳野市域における民家建築の指標となりうるもので、羽曳野市を代表する民家建築のひとつと評価できることから、平成29年3月27日に羽曳野市指定文化財(建造物)に指定されました。(羽曳野市教育委員会)

<表紙写真説明> 今回の表紙写真は畑田家の長屋門です。長屋門はもともと近世の武家屋敷の門形式の一つですが、民家では村役人または名字帯刀を許された家の門形式として公許されていました。扉脇に部屋があり、出格子と呼ばれる出窓に格子がはまった窓がついています。部屋は武家屋敷では家臣の居所としての長屋で、民家では下僕の居所や物置として使われていました。長屋の一部が前に出て作られているものは番所と言われますので、この門脇の部屋は主に見張りの役目があったと思われる。うす暗い部屋からは格子を通して明るい外の様子が良く見え、外からは中が見えにくく、格好の見張り場所になっています。門は2枚の門扉とその横に潜り(くぐり)戸があります。門も立派な造りになっていて、風格があります。門扉と扉周りは今では手に入りにくい幅の広いきれいな木目の板が使われていて、新築時の美しさは今以上であったことと当初が偲べれます。(石井智子)

〈行事に参加していただいた方々からの感想文〉

春の一般公開と第21回畑田塾 2018年3月18日(日)

「自分探しの旅—科学、音楽、美術を通しての提言」

高分子科学者 北山辰樹、声楽家 畑田弘美、画家 中村貞夫

人はそれぞれに唯一無二の生を受け、生まれ、学び、働くなかで自己を形づくっていく、自分探しの旅をしているのです。このフォーラムでは、それぞれに分野の異なる3人の講師がどのようにしてその仕事に出会い、何を考え、何を求めて自分探しの旅を歩んできたかを語り、それを契機に、参加者の皆さん一人ひとりにとっても、これまでのことを振り返り、あるいはこれからのことを考え、互いに語り合い、さらには、自分では気付かなかった能力を見つけ出す、新しい自分探しの旅のヒントをさぐりました。各講師の提供した話題の一端を以下に記します。

高分子科学者 北山辰樹 理科が特別に得意科目でもなかった私が理系を選び、科学の中でも化学を選んだのは高校時代の人との出会いと偶然によります。高校一年のクラスで出会った4人組の仲間の一人がある日突然「化学部に入ろう」と言い出し、言い出した本人が早々に退部してしまい、成り行きで二年生のあいだ部長を務める羽目になりました。他の科目より化学が身近になって、大学は化学を選びました。それが一生の仕事、職業になろうとは夢にも思いませんでした。

声楽家 畑田弘美 子供のころからただただ歌うのが好きでこの道に入りましたが、学べば学ぶほど音楽の奥深さを知る喜びに導かれて、プロとして舞台に立つようになりました。女性が個人として音楽家になることの難しさも経験し、今は教える立場になって、声楽の技術を伝える難しさを実感しています。

画家 中村貞夫 油絵を始めたのは、高校の頃です。3年生で、小磯良平画伯らが率いる新制作派(のちの新制作協会)の展覧会に入選したのをきっかけに画家としての人生をスタートさせようと思いました。小磯氏の「これからの画家には教養が大切だよ」という一言がきっかけで、大阪大学文学部へと進みました。絵の表現に迷い、悩むとき、画家ばかりでなく、哲学者や数学者のことばに目を開かせられることがしばしばあります。この会では、参加者全員に白紙に円を書いてもらって、それぞれが違う大きさ、違う形の円になることをきっかけに、個性とは、自分とは何かを考える機会にしました。

以下に参加者からの感想文を記します。

◆これからの人生を輝かす 今回の畑田塾は「自分探し」という、どちらかというと青年期にふさわしいテーマをあえて熟年期のメンバーで考える企画に興味を持った。自分の歩んできた道を振

り返りながら、その人生の物語をどう見るか、どう解釈するかという面白さ、それは同時に、これからの限りある人生をどう生きるかにつながり、まさに「自分探しの旅」である。

フォーラムは高分子科学者、声楽家、画家の3名のパネラーが自身の人生を語る場所から始まった。3名とも、今充実した思いを持っておられるだけに過去の足跡も示唆に富んだものであった。参加メンバーを含めて自身の人生を振り返った時、そこにはどのような言葉が紡ぎだされるか、同時にそれが今後の人生をどう描くかを表現することにもなる。お互いの人生を味わい、学びあいたいものだ。これからの人生を輝かせる材料にもなるし、次世代へのメッセージにもつながっていく。最後にパネラーが使った言葉で心に残った言葉をひとつ紹介しておきたい。「人は自分を越えたものを拒絶する傾向がある」自戒したい。

(八尾市 神野武男)

◆使命を見つける 昨今ニートと呼ばれ、学校を卒業しても働かず自分探しと言ってブラブラしたり、また、就職しても自分に合わないからと言ってすぐ辞めてしまう若者が増えている。

「自分探し」とは? 教育学者の故森信三先生によると「人は皆自分の使命について記された天からの封書を頂いて生まれてくる。しかし1回も封書を開けず一生を終える人が多い」と言う。

畑田弘美先生は育った環境から子供の頃既に決心され音楽家に、そして北山辰樹先生、中村貞夫先生は人生で出会った方の影響を受けてそれぞれ科学者、美術家となり、天の封書を開けられた。社会との繋がりの中で、多くの人に感動を与え、その道を極める活動を続けていらっしゃる。

自分の天分、使命が分からなければ、まずは置かれた立場で、自分の役割に全力投球することで道が開けて来るように思う。

唯一無二の人生、自分の使命を見つけ出し、それを通じて更に新しい自分探しの旅に出たい。息絶えるまで。(堀正博)

◆文化財である畑田家のお屋敷を見学させていただいて先人の偉大さを肌で感じました。長屋門や鼠返しの板、井戸に落としたものを引き上げる小道具や五右衛門風呂、初期の水道管、古材の保存・再利用などとても興味深いものでした。

私は田舎暮らしにあこがれて数年前に築100年を超える古民家を購入したのですが、今後どのように手を加えていくべきかを考えているところで、とても参考になりました。物を大切にすることは優しさや思いやりにも繋がるような気がしています。

文化財としてのお屋敷を存続させるにはいろんな面で大変であることも痛感しました。大切に守っておられるのに思わず頭が下がります。

また、珍しい型のオルゴールを見て聞いて、その音色で癒されるような自分、心が洗浄されるような自分に気づきました。

畑田塾では「自分探しの旅」というテーマでしたが科学者・美術家・音楽家としてのお話だけでなく参加者全員からそれぞれの考えや思いをお聞きすることができました。とても有意義な時間だったと思います。(兵庫県朝来市 竹村芳子)

◆太い梁のある工夫された間取りとしつらえの素晴らしい旧家でのこの塾がもう 21 回を迎えていると知り、感激いたしました。分野の異なる 3 人の講師の方々が仕事との出会いや自分探しの旅などについて語ってくださいました。高分子科学の北山先生が紹介されたノーベル賞受賞者の語られた「分子は美しい」という言葉になぜか惹かれました。画家の中村先生はご自身の描かれた砂漠の絵の下で話されましたが、自分を豊かにするには世の中の最高の物に接すること、美しいと感じることが大切とおっしゃっていたのが印象に残りました。声楽家の畑田先生のお話興味津々でしたが、その美しいお声で1曲でも2曲でも聞かせていただきたかったところです。ちょっと残念でした。

私のような分野外の一般人には十分理解できないところもありましたが、参加者とのディスカッションもあって充実した時を過ごすことができました。(羽曳が丘 山口初枝)

◆科学、音楽、美術、どれをとっても高度なお話でしたが、日々の生活に追われて過ごすなかで、新しい発見をしました。画家の中村先生の「正解は一つではない」とのお話を聞き、新しいことに挑戦して個性を生かしたら素晴らしい自分が発見できて、今後の生活に希望が持てるのではないかと思います。音楽の畑田先生にはご指導をいただく機会があり、歌う楽しさと「喜怒哀楽」の表現を声に出して身体で感じることを教えていただきました。科学の話は十分には理解できず、緊張しながら座っていましたが、参加者の皆さんも真剣な雰囲気聞いておられたのが印象に残りました。今後も畑田塾がさらに発展し、地域に貢献されますよう祈念いたします。(シグナス混声合唱団 桑原節子)

初夏の一般公開とフォーラム 2018年5月20日(日)
「木造住宅これまでとこれから」 建築家 石井智子

木造住宅の工法には主に以下の 3 つの工法がある。①伝統木構法(1950年近くまで用いられてきた古来から伝わる構法、歴史のある民家はこれにあたる)、②在来軸組構法(昭和25年に建築基準法が制定されてから一般的に建てられてきた柱、梁などの軸組に筋かいを用いる構法)、③枠組壁構法(主に北米で

行われているツーバイフォー構法、38ミリ×89ミリの材料を基本とした規格断面木材を用いる構法)。

現代ではほとんどの住宅が②や③の構法で建てられている。伝統的な木構法で建てるとなると、建築工事期間が長くなり、工業生産品を使わず、ほとんどが職人さんの手作りのため価格が割高になる。余程の日本文化に理解のある人でないと、伝統木構法を選ぶことができない状況であるが、実はとてもよく考えられた素晴らしい構法である。たとえば、「曳家」「建て起こし」「揚げ前」によって倒れかけていても起こすことができ、場所を移動することもできる。さらに、「柱の根継」「大黒柱入れ替え」などで建物を潰さなくても修理することができる。「仕口」「継手」によって、部材を再利用することもできる。一方で、この構法を採用するには、限界耐力法や構造計算が必要、技術を持った大工さんが激減している、人の手によって作るため日数がかかる、などの問題がある。また、大きな部材を使う人が少ないため、山持ちの方がせっかく育てた中径木も安い値段で売られ細かくされて新材材になっているのが実情である。さらには、これまで日本全体の森が守られるよう調和のとれていた山の仕組みが崩壊しているなど、厳しい現実がある。建築の機会がとて最少なくなっているが、本当に長寿命の家を作るには、伝統木構法しかないと考えている。(石井智子)

◆在来工法の木造住宅の今後は、施主側の意識が重要であろう。その意識を持ってもらうには、在来工法が安全、安心の構造であることのアピールを建築に携わる側から発信されなければならない。不幸な出来事ではあるが、地震や、大火時の安全性について、住宅メーカーの住宅との比較をアピールしていかねなければならない。様々な場面で、在来工法が優位である事は聞こえてはくるが、大量に垂れ流されている大手住宅メーカーの商業収入にかき消されているように思える。メディアも商業収入に頼っているために、本来報道すべき内容を希薄に扱っているように思える。同じ考えを持つ、建築士、工務店、大学の研究者などのネットワークを構築して、情報の収集、データの蓄積、更にそれを公開していかねなければならない。しかし、その情報発信の方法が最も難しい部分であろう。

施主側が情報を得て在来工法の良さを理解できても、いざ実行に移す場合の最大のネックは費用である。材木の価格は安いのなら、人件費やその他の費用を抑える工夫をしなければならない。更に、地産地消の考えに立てば国産材を活用すべきである。その上で、林業家、製材業者、建築家、工務店、施主のいず

れもが満足できるシステムを考えていかねば、在来工法の木造住宅が復権する未来はないのではないか。難しい問題である。

(放送大学大阪学習センター 水の会 近藤芳史)

◆今回も素敵な講座を設けていただき、ありがとうございました。講演後の「これでもか、これでもか」と言うほどの畑田先生の質問攻めは、私の職場で医師が会議の中で、質問攻めにしている場面を思い出させるものでした。有識者の間では、このような高いレベルの議論がなされるのだということが分かりました。畑田先生や医師の幅広い知識と頭の回転の速さに驚くと同時に、私もそうなりたいと思うことがあります。

テーマに関係なく畑田塾に参加しているのは、先生や参加者の思考方法を吸収し、学ぶ姿勢から参考になることが沢山あるからです。緊張感があり、脳に汗をかく能動的な講義は、まさにアクティブ・ラーニングで、考えるヒントの宝庫でもあります。

私は、書くこと、話すことが苦手なので、厳しい環境に身を投じる機会を作るようにしています。このように感想を書く機会を与えていただき、感謝しております。文書を書くことは、脳に汗をかくことだと感じながら書いております。畑田先生の死ぬまで、報告書を書き続けるという強い意志と、後進の育成の役割も果たされる点に敬服いたしました。次回の畑田塾を楽しみにしています。(羽曳野市 松浦泰三)

秋の一般公開と科学フォーラム 2018年11月11日

「巨大分子の面白さ — プラスチックとゴム」

大阪大学名誉教授・畑田家当主 畑田耕一

畑田家当主は大阪大学で長年にわたり高分子科学を専門に教育・研究をされていた。その傍ら小・中・高等学校での出前講義などで科学の啓蒙活動を精力的に進められ、その活動は現在まで続けられている。今回は、ホームグラウンドである畑田家を舞台に、一般の方々を受講生に迎えて、実験を伴う出前授業をされた。

講演に先立って挨拶に立った畑田出穂会長は生命科学の研究者で、ノーベル賞の受賞対象にもなったオプジーボ(本年報の会長巻頭言 参照)もタンパク質という高分子であり、身の回りのプラスチックだけでなく、ヒトの体も多くの高分子からなり、高分子がいかに身近な存在であることを強調して、父君である講師の畑田耕一先生を紹介された。

今回の講義の舞台はいつもどおり仏間であるが、実験もされるので畳にビニールシートを敷き、講師は安全基準を守って革靴着用で登場された。講義や実験をサポートする矢野富

美子幹事がおもむろに後ろの仏壇の扉を開け、当主のご先祖が見守るなかで講義が始まった。

講義は、分子とは何かからはじまって、分子の運動、分子の大きさと性質へとつづき、高分子(巨大分子・ポリマー)につながっていったが、分子の説明の例が「おならの匂い、角砂糖を溶かす、ヘリウムを入れた風船」の順で、おならからはじまるのには参加者も戸惑いつつも、畑田講師独特の話芸に引き込まれていくようであった。何事にもまじめに好奇心を働かせる畑田先生のこと、この「おなら話」も周到に準備されていて、すでに本保存会のホームページ「文・随想のページ」(74)「おならを楽しむ—プッ、プッ、プッ」という4ページに及ぶ随想を書かれている(http://culture-h.jp/hatadake-katsuyo/bun74_enjoy_onara.pdf)。

分子から高分子に話が進み、プラスチックのエンジンカバーや超高分子量ポリエチレン繊維、カメラ部品など様々な高分子製品を使い、ポリマーの成型や光ファイバーなどの実験を交えながら行われるこの出前講義のスタイルは、参加者に体験を伴ってポリマーの特質を実感させてくれる。詳しい説明は、ホームページの「みんなの科学」の記事(2)「物はすべて分子という小さな粒子から出来ている」が参考になる。

ポリマーの絶縁性の説明では、電気コードの被覆に使われるポリ塩化ビニル(塩ビ)を例に、ポリマーの劣化による漏電の危険性が指摘された。畑田家には二本の電線を碍子で固定した古い電気配線と、比較的新しい塩ビの電気コードが共存している。古い配線では電気が二本の電線で流れていることがよくわかる。見かけが1本の塩ビ配線を見慣れた参加者の中には、電気が二本の電線で流れるという、理科で習ったはずの基本的なことを忘れていたという方もあった。学校で習うことは教科書の中だけで、現実とのつながりがないまま、覚えるだけの知識になってしまっていないかが心配であるとの意見も聞かれた。学校教育(教室の中の授業)のうちだけに閉じてしまうのをさけるには、一般人(実際に仕事をしている現場の人、現場経験者)の手助けが有効ではないかと思う。出前授業の意義を学校教育の社会への開放という立場から考えることもできよう。

後半はゴムが主題になって、実験を中心に展開され、分子運動と温度、ゴムの伸び縮みと温度、ガラス転移温度、形状記憶ポリマーなど、やや高度な内容を含む話になった。ホームページの「みんなの科学」の記事(3)「ゴムの面白さ—絶対零度の値を求めよう」に詳しい解説がある。形状記憶が



リマーの実験では、参加者にうちわで風を送らせてポリマーを冷やしたり、お湯を入れたビーカーを持たせて目の前でポリマーが形状を取り戻す現象を体験させたりするなど、質問も多く出て、インタラクティブな双方向授業が実践された。

上の写真は温めた形状記憶ポリマーを伸ばして、うちわで冷やす実験、右は原型とは違う形にした形状記憶ポリマーを湯に浸けて元に戻す実験である。



本フォーラムに寄せられた感想・ご意見の一部を次に記す。詳細は畑田家住宅活用保存会のホームページに掲載の予定である。

◆母の実家は播州にある江戸時代初期の庄屋住宅でしたが、13代目が10年前に建て替えてしまい、今は当時の面影をしのぶことができません。畑田家住宅では、縁側から差し込む

晩秋の冷たく澄んだ光が、時の流れを感じさせる建具や調度品に染み渡り、暖かく、やさしく包んでいるように感じました。畑田家住宅活用保存会の活動が永く続くことを願っております。また、午後からの科学フォーラムでは、先生がたの若さに圧倒されながらも、私自身学生時代にもどり、楽しい時間を過ごさせていただきました。（神戸市 今田和子）

◆畑田家住宅活用保存会の活動については、大学時代の恩師である畑田先生が書かれた記事などで断片的には知っていましたが、畑田家住宅を拝見したいという家内の希望もあり、今回初めて参加させていただきました。「分子」という目に見えない世界に興味を持ってもらえるように、多くの実演・実験を取り入れ、参加者を巻き込んで進める「科学フォーラム」は、往年の畑田先生の講義を彷彿とさせ、昨今盛んに導入が求められている「アクティブ・ラーニング」を当時から実践しておられたことを改めて実感しました。畑田先生の小学校への出前講義は、「理科好き」を確実に増やしていると確信しました。（神戸市 今田泰嗣）

春の一般公開と古民家フォーラム 2019年3月10日

「古民家に学ぶ」

寺西興一、青山修司、吉村堯、細見克、地村邦夫

この行事の感想文は編集の都合上、次の年報に掲載します。

2017年の出版「双方向授業が拓く日本の教育 — アクティブ・ラーニングへの期待」に寄せられた感想・意見

「双方向授業が拓く日本の教育 —アクティブ・ラーニングへの期待—」

畑田 耕一 編著、大阪公立大学共同出版会、2017.3, pp.305, ISBN 978-4-907209-69-8

- <目次>
- 第1章 双方向授業 —想像力を養おう—
 - 第2章 双方向授業は日本の未来を築く
 - 第3章 教育の素晴らしい未来を拓くために
 - 第4章 これからの日本の教育 —物事の根本原理を考える力と習慣—
 - 第5章 道徳と科学 —その根底の力は想像力—
 - 第6章 「あたりまえのこと」と「あたりまえでないこと」 —論理的に考える教育の必要性—
 - 第7章 初等・中等教育における学校、家庭、地域社会の役割
 - 第8章 キャリア教育の推進 —職場体験学習を考える—
 - 第9章 豊中ロータリークラブの出前授業これまでとこれから
 - 第10章 終章

2017年3月に、畑田塾や豊中ロータリークラブの教育フォーラム、出前授業など教育関係の活動の成果を示す書籍「双方向授業が拓く日本の教育 — アクティブ・ラーニングへの期待」が大阪公立大学共同出版会から出版されました。会員各位には同年の年報と一緒にお届けしました。何人かの会員から下記の通り感想・ご意見をいただいています。

◆ただいま「双方向授業が拓く日本の教育」を拝受いたしました。この本のもとになるような活動を続けておられますことに、心からの敬意を表します。これだけの本をおまとめになるのには、大変な時間と労力を費やされたことと存じます。ご惠贈いただきましたことに厚く御礼申し上げます。

装丁やレイアウトを見ますと、「大阪公立大学出版会」もまずは合格というところではないでしょうか。いくらかのご相談に乗ったこともあり、ちょっと胸をなでおろしております。

(大阪狭山市 南 努)

◆この度は“双方向授業が拓く日本の教育”をお送りいただき、ありがとうございます。大阪工大ほかでまだ授業をしていますので、参考にさせていただきます。(辻本良信)

◆過日は、畑田家保存会年報とともにご高著「双方向授業が拓く日本の教育」をご惠投いただき、まことにありがとうございます。多くの方々の発言を録音テープから起こされて、統一のとれた文章にまとめるというとても手間のかかる作業を経た章が多く、さぞさぞ苦勞されたことと感服いたしました。

(茨木市 肥塚 隆)

◆「畑田家住宅年報」を毎回拝読して、いろいろな先生方のお話からご教示を得ています。

先に住宅遺産の特集を組まれた大阪大学出版会のご本も拝受して、いろいろ知らない重要な住宅の存在も知りました。このたび「双方向授業」に関する貴重な記録を収めたご本を拝受致しました。お礼が遅くなって申し訳ありません。連休になってこちらも拝読できました。今称えられているアクティブ・ラーニングの実践に、すでに何十年も前から取り組み、その実績と効果を確認しておられる畑田先生の自信に溢れた教育実践のありようが、生徒たちとのそれこそ双方向の対話の実際を交えてのご高説になるほどと案を打つ思いを致しました。他の先生方をも交えた充実した内容で、示唆されるところが多いものでした。遅まきながらお礼申し上げる次第です。(柏木隆雄)

◆年報(No16)と「双方向授業が拓く日本の教育」をお送り下さいます。有難うございます。先生の編著「双方向授業が拓く日本の教育 アクティブ・ラーニングへの期待」を読んで、「双方向授業」×「アクティブ・ラーニング」がやっと解った気がしました。「アクティブ・ラーニング」は、昨年(2023)の日本化学会春季年会(同志社大学)での化学教育フォーラムがあり、「化学と教育」でも掲載されていましたが、以前から先生が実践されておられた「双方向授業」との関係がよく分かりませんでした。

3月半ば頃、奈良女子大学の「理系女性教育開発共同機構」

主催のシンポジウムで「Lovely, Active, Dynamic な物理教育」という講演をされた方が、これがアクティブ・ラーニングですと主張したら、「高校の教育現場ではそれよりも受験をどのようにして突破するかの方が大事なのです」と言われて驚きました、と発言されたのを興味深く聞きました。

「生徒の中には発言できない障害者もいるし、高校生にもなる生活費のためのアルバイトをする生徒がアルバイト学生中半数以上いる、高卒では駄目で、大学や専門学校に行かねば貧困から抜け出せない、手っ取り早く傾向と対策的な勉強も必要」など言われました。大学入試が変わらねば、或いは会社の入社試験が変わらねば、教育も変わらないと感じました。

先ず、大学の講義が変わる、「双方向授業」とか「反転授業」×「アクティブ・ラーニング」にならねばと思いました。遅すぎますが大学生ならば「双方向や反転」授業でも「やらねばならない」と「トマト人間」から脱却出来ると思います。「トマトを育てるには畑に頑丈な支柱を作り、トマトを紐でこの支柱に誘引し、さらに芽掻きして葉が茂り過ぎないように、水やりや肥料のやり過ぎに気を配れば、美味しい実が出来る」とのことです。先生のご編著「双方向授業が拓く日本の教育 アクティブ・ラーニングへの期待」が有効に広まる事を願っております。(豊中市 浜中佐和子)

◆この度は立派なご本をお届けくださり誠にありがとうございます。早速仏前に報告いたしました。表紙の先生が大変印象的で毎日眺めています。ゆっくり楽しんで読ませていただきます。(堺市 結城嘉子)

◆年報表紙には「脳と AI とゆらぎ」が目飛び込んできました。数年前からゆらぎに興味を持っていました。また本では「アクティブ・ラーニング」「道徳と科学」もとてもタイムリーなテーマと感じました。畑田家で学んだ縁で週一回自彊術のクラブに参加しています。また、それがさらにつながって毎日早朝の太極拳にも出るようになりました。自彊術が 10 カ月、太極拳が 6 ヶ月、年報にも記した「いつとはなしに」という言葉を実感しています。身体の変化に気づくとき、継続の力を納得します。常に興味の対象を用意していただける畑田家の活動に心から感謝いたします。

(八尾市 神野武男)

◆先日は立派なご著書を頂戴し恐縮いたしております。ゆっくり拝読させていただきますが、パラパラと頁を繰りましたら鶴亀算と文化芸術立国という項が目飛び込んできました。その昔、小学校の頃、学校で話に、父から鶴亀算やカタツムリ算などを学んだことを懐かしく思い出しました。あれは日本の文化だったのですね。良い御本を有難うございました。(神戸市 大西のり子)

科学者、医学者、文学者、音楽家、ジャーナリスト、棋士、茶道家、能楽師……。実に様々な分野にわたる人材をお招きして開催される畑田塾も、21回を重ねました。畑田塾の魅力は枚挙にいとまがありませんが、特筆すべき点として次の三つを挙げたいと思います。

1つ目は、毎回の講師それぞれが各界を代表するトップランナーであることです。ノーベル賞受賞学者や大学総長、お家元など、塾頭の畑田耕一先生の志に共感される有為の方々を共にできることは貴重な機会です。2点目は、このような貴重な機会が講義室や会議室等ではなく、文化財（国の登録有形文化財）の一室で行われていることです。百年以上の歴史を刻む建物で、専門家と畳一畳の距離でその息遣いを感じながらお話を耳を傾けるのは、なんとも贅沢なひと時です。音楽を聴く機会には、家全体が共鳴し、巨大な楽器と化した文化財の中で音の調べに耳を傾ける至福の時間となります。住居は単なる雨露を凌ぐための箱ではなく、人間形成のために重要な学びの場であることがよくわかります。畑田家住宅での豊かなひと時は、参加者の情操に訴え、これを豊かにしてくれるのです。3点目は、講義形式ではなく、講師との対話や議論を中心にすすめられることです。一方的に話を聞く講演会とは一線を画すこのスタイルは発足当初からの畑田塾の十八番です。小学生との対話は毎回熱を帯び、時には専門家をもうならせるような議論が繰り広げられます。

現在、国の教育施策が大きく転換されようとしています。知識・技能の習得と思考・判断・表現力等の育成のバランスを重視する現行の枠組みに加えて、「主体的・対話的で深い学び」のキーワードのもと、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した学習を、学習者と教師の双方に求めています。これこそまさに、畑田塾で平成12年の第1回以来脈々と行われてきたことなのです。

素晴らしい機会を提供する畑田塾に願うことがあります。中学生や高校生にこそもっと参加していただき、この素敵な時間を共有してほしいということです。幼少期の体験は一生を左右する経験となることが間々ありますが、畑田塾はある程度経験や学習を積んだ中高生に深い学びの場を提供し、人生の決定打となる出会いの場にもなり得ます。最近各地で催される文化フォーラム等には、若し可能であれば中高生も参加してくれるのが望ましいと思われるものがありますが、実際には生徒の参加はほとんどないようです。休日の大半を部活動や模擬試験、塾や補習授業などで拘束され、平日と同じように学校や塾と家の往復だけになってしまうのはもったいないことだと思います。授業のない日には中高生を社会や家庭に返し、畑田塾のような機会にゆとりを持って参加できる環境を整えることもまた、主体的・対話的で深い学びにつながると思うのですがいかがでしょうか。

平成30年4月1日から平成31年3月31日までの収支決算

収入の部		支出の部	
前年度繰越金	120,681	講師謝礼	40,000
会費	510,000	年報作成費	64,800
雑収入	6,200	出版書籍購入費等	129,600
		通信費(郵送料、振替手数料等)	80,350
		事務費	7,696
		雑費	37,275
		次年度繰越金	277,160
合計	636,881	合計	636,881

会計監査: 会則第6条の規定に基づき平成30年度の収入及び支出に関し、決算並びに関係書類を厳正に監査した結果、いずれも適正かつ正確に処理されていることを認めます。
平成31年3月31日
監査担当 澤田秀雄 ㊞ 宮田幹二 ㊞

事務局 大阪府羽曳野市郡戸471 畑田庸雄 電話 072-762-7495 E-mail hatada@wombat.zaq.ne.jp

畑田家住宅活用保存会ホームページ <http://culture-h.jp/hatadake-katsuyo/>

会費の納入は郵便振替(口座番号 00980-2-41107 加入者名:畑田家住宅活用保存会)へお願いいたします。

あとがき: 平成30年度も皆様のご協力のお蔭で一般公開とフォーラムを楽しく充実感を持って行なうことが出来ました。出版No.14「宇宙で一番低い温度をつくる(児玉隆夫)」では、上限はないが下限はあるという温度の本質と、低温の限界(絶対零度)に迫る低い温度の作り方を出来るだけ分かりやすく解説していただきました。今後ともよろしくご支援の程お願い申し上げます。(KH)